

登場人物

毛利 桔平（もうり きっぺい）

男。大学生。

柔道世界選手権に選抜され、卒業後はセキュリティソフトの有名企業への就職が内定している。

通常時 10.6 センチ、勃起時 24.7 センチのずる剥け太魔羅

高野（たかの）

男。大学生。桔平の親友。

【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。

無断転載・私的利用の範囲を超えた共有など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いいたします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなっております。現実のセックスへの参考にならないようお願いします。

第一話

毛利桔平（もうり きっぺい）は自宅アパートの一室を檻に入ったゴリラのようにうろ
うろと歩いていた。

服装も普段アパートで過ごすときのスウェットではなく、柔道着を着た臨戦態勢で、そ
の目は鋭く敵を探している。

敵、そう、敵だ。

桔平はテーブルの上に置かれた黒いスマホを怨敵のように睨みつけた。

スマホの待ち受け画面を思い出すたびに怒りと屈辱がこみ上げる。

どういう経緯かは分からないが、桔平の指紋を登録された黒いスマホの待ち受け画面に
は、桔平の下腹部が、いや、はっきり言ってしまおう、黒々としたチン毛に埋もれること
なく存在を主張する桔平の太魔羅が写し出されていた。

桔平は剛毅さに満ちた顔つきに相応しく、体毛が濃い男だ、いや、雄というべきか。

柔道世界選手権への内定が決定し、卒業後は一流企業がスポンサーとなることが確定し
ている桔平はその体軀も男らしさに溢れており、ひとたび服を脱げば、一般人たちが己の
肉体を恥じるほどに鍛え上げられた裸体が露わになる。

その裸体は力みなぎる筋肉の凹凸で覆われており、その肉体を濃い体毛が彩っている。

胸では十字のように黒い毛が生え、真っ直ぐにへそに向かって降りている。

へそから左右に広がり、下腹部では黒々とした茂みとなっている。

常人のチンポではその茂みに隠れてしまいそうだが、桔平の太魔羅はその茂みの中でさ
え存在感を示していた。

平常時 10.6 センチの太魔羅のずる剥け亀頭は柔道一筋で女を知らぬまま二十歳を過ぎ
た桔平に相応しいピンク色をしており、雁首で一端狭まったあと、徐々に根元に向けて太
く逞しくなっている。

勃起すればまさに凶器に相応しい威容を誇り、柔道部の面々には「ぶちぬいちゃうだ
ろ、それ」とからかい半分、羨望半分の眼差しを向けられている。

そんな陰茎に負けず劣らずの大きな金玉が二つぶら下がっており、玉袋にも毛が生えて
いる。

桔平の身体では珍しく無毛である蟻の戸渡りを抜けた尻側は屈強な大殿筋が雄の魅力を
湛えており、その谷間はみっしりとケツ毛が生えそろっている。

その濃さは大便後に紙で尻を拭くだけで毛が多く絡むほどだ。

腕や太もも、脛も男らしさを彩る体毛に覆われた桔平はまさに雄を体現する存在だ。

そんな桔平の男らしさの粹を集めた太魔羅が無断で撮影されていたのだ。

桔平は露出狂ではない。

ネカマに騙されて自撮りをしたこともない。

それなのに、どういう手段かは分からないが桔平の秘所が踏み荒らされたのだ。

そんなスマホを送りつけられただけでも許せないのに、同封されていた文章が更に桔平
を怒らせた。

毛利桔平へ

このたび、性奴隷管理委員会はあなたが無為に放置している童貞太魔羅の運用方法について、今後、必要とするお客様の性的愉悦のために活用することを決定いたしました。

つきましては、毛利桔平を当委員会管理番号 52 番とし、以下の事項を決定いたしました。

- 一つ、管理番号 52 番の許可のない自慰・性交を禁じる。
- 一つ、管理番号 52 番は当委員会が指定する下着を着用する義務がある。
- 一つ、管理番号 52 番は法律に違反しない範囲で支給したスマホを携帯する義務がある。
- 一つ、管理番号 52 番は当委員会の教育プログラムに従う義務がある。
- 一つ、管理番号 52 番が上記四つの項目に従う限り、当委員会は管理番号 52 番の日常生活を保障する。

教育プログラムは今夜から開始します。

毛利桔平は午後十時までに同封された目隠しのみを装着したうえで、玄関の鍵を開けて待機するように。

一方的な通達、しかも、桔平が童貞であることを揶揄するかのような文言。

桔平は警察への通報など頭から消え去るほどに激怒した。

実を言うと、桔平は過去に三度、女性と交際していた。

だが、いずれの女性も桔平の太魔羅がその本性を露わにすると怯え、それが原因でギクシャクし、別れるということを繰り返していた。

柔道界の期待の選手だというのに、女を知らぬ現実には桔平にとって屈辱でしかない。

それをこのように言われた挙句、性奴隷管理委員会？

何処の変態かは知らないが思い知らせてやる。

桔平は送りつけられたスマホと文章を見てからの三十分、敵を待ち構えていた。

時計の針はもうすぐ十時だ。

戸締り確認は済ませており、侵入経路はアパートの玄関だけ。

何処の変態かは分からないが、喧嘩を売ったことを後悔させる。

桔平はその決心を胸に、玄関を見据えた。

部屋の電気が急に消えた。

桔平は暗闇の中で気配を探った。

正面には玄関。背後には戸締りを済ませた部屋がある。

来るなら正面しかないはずだ。

「!!!!!!!!!!!!」

次の瞬間、桔平は予想外の事態に悲鳴すら上げられなくなった。

男ならば何よりも恐れる激痛が桔平の金玉を襲ったのだ。

何者かが戸締りをしたはずの背後から桔平の股間を情け容赦なく蹴り上げたのだ。

激痛で涙が零れるが、優れた柔道家でもある桔平は金的一撃で倒れるほど軟弱ではなかった。

それがよくなかった。

桔平は獣の断末魔のような奇声を発した。

何者かの手が桔平の金玉を握りこんだのだ。

さすがの桔平も金玉を押さえられては唯の男に成り下がる。

必死に金玉から手を引きはがそうとするが、鍛え上げられた桔平の腕力をもってしても桔平の金玉を苛む手は剥がせない。

それどころか……

「ぎゃ、ぎゃ、ぎゃあああああああああああああああ！」

桔平をより長く苦しめるためか、桔平の金玉を握る手が徐々に力を強くし始めたのだ。

桔平は己の金玉を解放するべく、必死に指に力を入れるが、桔平の金玉を掴む手は岩のように微動だにせず、徐々に徐々に、桔平の金玉を追い詰めていく。

「あ、おがっ、あがっ、ぎ、ぎいいいいいいいいいいいい！」

とうとう桔平は崩れ落ち、尻を突き上げた情けない格好になった。

桔平を柔道界の雄だと信じているファンに見せたら失望されかねないほどに、桔平の顔は苦痛に歪んでいる。

急に部屋に電気がついた。

玄関に三台、三脚に乗ったビデオカメラが設置されているのを桔平は涙目で確認した。

勿論、桔平が設置したものではない。

ビデオカメラが桔平の醜態をじっと見つめている。

「管理番号 52 番、なぜ指示に従わなかった？」

電子音声桔平の耳に入った。

桔平の周囲に二人、仮装大会で見かけるミイラ男と狼男のマスクを被った男が立っていた。

いつの間にこの部屋に侵入したのかは分からない。

だが、もう一人この部屋には侵入者がいて、その人物が桔平の金玉を握り締めているのだ。

「管理番号 52 番、なぜ指示に従わなかった？」

ミイラ男が苦悶に顔を歪める桔平の顔を観察するためにか、しゃがみ込んだ。

だが、桔平は男の最大の弱点を苛まれる激痛を堪えるべく、呼吸を繰り返すことしかできないので返事はできなかった。

「理由はどうでもいい」

狼男が電子音声で告げた。

「重要なのは管理番号 52 番が当委員会の指示に背いたことだ。

罪には罰を与えなければならない」

狼男が桔平を見下ろした。

「潰せ」

「ひぎゃあああああああああああ！」

金玉に加えられる力が一気に強まった。

桔平は恥も外聞もなく、涙と鼻水と涎を垂れ流して悲鳴を上げた。

ミチミチ、と金玉の悲鳴が聞こえてくる気さえする。

激痛のあまり、視界がどんどん狭まる。

桔平の脳裏には、スクラップ工場で潰される廃車が浮かんだ。

ゆっくりと圧縮されていく、あのイメージだ。

桔平はこのまま己の金玉が潰されるのではないかと唐突に確信した。

このままでは、女を知ることなく、男ではいられなくなる。

激痛と共に襲ってきた恐怖のヴィジョンに桔平の壊れかけた矜持が消し飛んだ。

「ゆるじで、ゆるじで、ぐだざああああい！」

桔平は激痛に震えながら狼男たちに泣いて許しを請うた。

このまま男でいられなくなるのは嫌だ。

金玉を潰されるのは嫌だ。

その一心で桔平は何度も何度も、許しを請うた。

だが、桔平の金玉は徐々に潰されていく。

桔平は許しを乞う言葉さえ言えなくなった。

「まるで、オットセイの鳴き声だな」

狼男が電子音声で嘲り笑うと、ミイラ男が電子音声で笑いだした。

桔平は目から大量の涙を流しながらオットセイの鳴き声を出し続けた。

ぷしゃあああああああああああ！

激痛に限界を迎えた桔平の膀胱が溜まった尿を吐き出した。

と同時に、桔平の金玉を苛む手が離れた。

桔平は噴出し続ける尿で汚れるのも構わずに、暴虐から己の金玉を守るべく、両手で股間を押さえた。

その指の隙間からも尿は逆りつづけ、桔平の柔道着に染みを広げていく。

尿の勢いが衰えていくのにつれて、桔平の頭で理性が働き始めた。

どこから侵入したのかは分からない。

だが、金玉が解放された今なら、この仕打ちの分を含めてやり返せるのではないかと！

桔平は床に手をつき、ゆっくりと立ち上がろうとした。

だが……

「罰はまだ終わりではない」

電子音声がかかると同時に、両足を持ちあげられ、身体をひっくり返された。

桔平の目に吸血鬼のマスクを被った男が映った。

三人の中で一番大柄で、桔平よりも雄の暴力性に満ち満ちた肉体をしているのが服の上からでも分かった。

己より圧倒的に優れた雄に襲われる経験は桔平にはない。

桔平自身、大柄な体躯に柔道で鍛え上げられた筋肉の持ち主ということもあり、身の危

険を感じた機会に乏しかったのだ。

だが、今、桔平は己より力のある雄の獲物にされている。

生物的恐怖から、桔平は激痛に苛まれ、疲弊した身体で抵抗しようとした。

だが、桔平の握力をもってしても引きはがすことのできなかつた握力を持つ吸血鬼は桔平よりも強力な筋力で桔平を拘束している。

「暴れるな」

そこにミイラ男まで加わり、あっという間に桔平は四肢を押さえつけられてしまった。

「ひ、ひいいいい」

桔平の口からこれから行われる蛮行への予感から情けない声が漏れた。

襲われる前の桔平ならば、雄々しく抵抗し、その鍛え上げられた肉体を持って必死に抵抗しただろう。

だが、暗闇の中で不意を突かれたとはいえ、金玉を徹底的に締め上げられ、去勢すら覚悟させられた桔平は、本気で抵抗することができなかつた。

男にとって悪夢のような苦痛と己よりも優れた雄に襲われているという現実が、桔平の心を折ってしまったのだ。

「世界選手権内定の選手のガチ悲鳴、最高」

ミイラ男が電子音声でケタケタとわざとらしく笑った。

そう、ここにいる桔平は雄々しい柔道選手ではなかつた。

男に襲われ、怯えるしかない哀れな獲物にされてしまったのだ。

狼男が素早い手つきで桔平の黒帯を解き、柔道着を脱がせ、一般男性から羨望の芽を向けられる逞しく、体毛の濃い肉体を晒しものにした。

「随分と雄臭い身体だな」

狼男が桔平の十字に生えた胸毛を掌で撫でる。

体育会系の桔平は身体を触られることに慣れている。

だが、桔平の体毛を撫でさする狼男の手つきは、おぞましきのみを桔平に与えており、桔平は唇を震わせることしかできなかつた。

狼男の手が腹筋から下腹部へと降りる。

そのまま、下腹部の濃い茂みを何度も撫でさすった。

「お前の泣きションでしっとりしているぞ」

狼男が桔平のチン毛に残る失禁の痕跡を笑うと、暴力に支配され縮みあがってもなお太々しい桔平の太魔羅を撫でさすった。

桔平の脳裏に先ほどの玉責めの恐ろしさが蘇る。

狼男が桔平の震えを楽しむかのように桔平の大きな金玉を握った。

「ひいい」

桔平は再び悲鳴を上げた。

「随分と情けない有様だな」

ミイラ男が電子音声で桔平を嘲笑う。

「お願いします、何でもします、だから、だから、もう——」

「赦しとは心から罪を悔いた者に与えられるもの。

苦痛に怯える猿には必要がないものだ」

狼男が無慈悲な言葉を口にする。

「情けない姿だ。

これが貴様の本性だ、毛利桔平。

お前のような生き物に、大人の男の証であるチン毛は必要ない」

狼男が電動カミソリを取り出した。

その電動カミソリに己の名を見つけた桔平は小さく息を漏らした。

合宿にも持っていく関係で愛用の電動カミソリには名前を書いているのだ。

「これから、お前の思い上がりの根源であるチン毛とケツ毛を剃り落とす。

少しでも抵抗すれば今度こそ去勢をする」

それが嘘ではないという証に桔平の両足を拘束する吸血鬼が無言で大きく頷いた。

桔平は必死で頷くことしかできない。

狼男が桔平のへその下の毛に電動カミソリを当てた。

ああ、これまで髭を剃っていた己の愛用の道具で剃毛されるのだ……

桔平は余りの屈辱に涙が零れた。

狼男は何度も電動カミソリを往復させながら桔平の体毛を剃り落としていく。

それが徐々に下腹部に近づき、桔平の太魔羅を彩るチン毛を剃り落としていく。

そうして、桔平のへそから太魔羅にかけてごま塩のように体毛とチン毛の後が残された。

桔平はこれで終わりかと思った。

だが、狼男は床屋で使うカミソリとシェービングクリームを取り出した。

ごま塩のように残る体毛とチン毛の痕跡にシェービングクリームを塗ると、狼男がカミソリを当てて徹底的に剃り落とし始めた。

そうして、桔平の雄臭い魅力に溢れていた下腹部は精通前の坊やのようにつるつるの状態にされてしまった。

「まだ終わりではない」

ミイラ男が電子音声で宣告した。

狼男が桔平の大きな金玉を手にとると、玉袋の毛もカミソリで丁寧に剃り落とし始めた。

急所を好きにされている恐怖で桔平は呼吸が荒くなる。

狼男が桔平の金玉から手を離した。

吸血鬼が桔平の足を持ちあげた。

抵抗する間も気力も起きないまま、桔平はちんぐり返しの姿勢を取らされた。

「無駄に濃いケツ毛だな」

ミイラ男がケタケタとわざとらしく電子音声で笑った。

狼男が桔平の分厚い尻肉を左右に割り、谷間に密集するケツ毛を剃り落とし始めた。

誰にも触れさせたことのない場所に金属の冷たさが触れる恐ろしさを前に桔平は何もできなかった。

「見ろ」

狼男が桔平の尻に鏡をかざした。

鏡にはケツ毛が綺麗に剃り落とされ、ピンク色のアナルがくっきりと見える桔平の尻が

写っていた。

恐怖に震える桔平の頭ではこの状況を正確に把握することはできなかった。

「では最後の罰だ」

ミイラ男の「最後」という単語に、桔平は恐怖とわずかな希望を覚えた。

狼男が抑え込まれた桔平の周囲に三脚付きのビデオカメラを配置し、位置を調整する。

「これから、お前の童貞太魔羅を抜き、セルフ顔射する様子を撮影し、無修正配信する」

ミイラ男の電子音声に桔平は息を飲み込んだ。

そんなことをされては、桔平の柔道家生命も、いや、男としてのプライドも粉々になってしまう。

「慈悲が欲しいか？」

ミイラ男の電子音声に桔平は声も出さずに必死に頷いた。

「では、管理番号 52 番が従順さを示すのならば、顔にモザイクをかけてやろう。

従順さを示せるか」

「は、はい！」

「では、従順さを示す条件を示そう。

セルフ顔射したのち、管理番号 52 番は己の童貞汁を飲み込み、その腹に着床させよ。

それを確認したのち、編集作業に入る」

ミイラ男の電子音声での宣告に桔平は頭が真っ白になった。

吸血鬼に勝てない桔平では、腕力や柔道でこの状況から逃れることはできない。

このままでは、桔平のセルフ顔射動画が無修正で配信され、桔平の柔道家生命も社会的生命も終わってしまう。

それを回避する唯一の方法が、己の精液を飲み込むこと。

できるだろうか……

否、しなければならない。

そうしなければ、桔平はすべてを失ってしまうのだ！

桔平は頷いた。

何度も何度も頷いた。

「そんなに己の童貞汁が飲みたいか、淫乱め」

ミイラ男が電子音声で嘲笑い、狼男がわざとらしく拍手をした。

そうして、狼男が貫通式のオナホを桔平の太魔羅に被せた。

自慰とは手淫でしかない桔平にとって、人生で初めての道具だった。

柔道で鍛え上げられた桔平の手とは違い、柔らかくしっとりとして太魔羅に吸い付く気持ちよさに、桔平の太魔羅は、このような異常な状況下だというのに徐々に太く硬く、逞しくなっていく。

にゆるにゆるとオナホが桔平の太魔羅を行き来するたびに、桔平は小さく声を漏らす。

だがそれは、先ほどまでの恐怖によるものではなく、快楽に染まった淫蕩な声だった。

「男に襲われている状況で感じるとは、管理番号 52 番よ、お前は教育のし甲斐がある」

「う、はあ、ううう」

ミイラ男の電子音声による嘲笑さえも、桔平の快楽を損なうことはなかった。

完全に勃起した桔平の太魔羅のパンパンに膨れたピンク色の亀頭から我慢汁が滴りはじ

める。

太魔羅を扱かれる快樂に喘ぎだした桔平の口に我慢汁が落ちた。

己の排せつ物が己の口に入ったことに桔平は顔を歪めた。

だが、これから、我慢汁など比べ物にならないほどのものを飲み込まねばならないのだ。

桔平の目から再び涙が溢れだした。

屈辱と恐怖と、そして快樂で感情が決壊したのだ。

「あ、ああ、くう、くはあああ」

桔平の口から快樂の喘ぎがますます大きく漏れる。

こんな異常な状況だというのに、いや、こんな異常な状況だからこそか、桔平は普段よりも昂った。

快樂に溺れて、男に襲われているという現実を頭から締め出そうとした。

桔平の腰の奥から精液が尿道にせり上がる。

「いくっ、いくっ、いくううううううううう！」

桔平の嬌声とともに、その太魔羅、その大きな金玉に相応しい量の精液が勢いよく飛び出した。

桔平の鼻、目元、頬、口にと、次々と精液が撃ちつけられる。

狼男が貫通式オナホを桔平の太魔羅から引き抜くと、尿道を指で扱き上げて、残留した精液を桔平の顔に落とした。

狼男が桔平の頬に着いた精液を指で救い上げると、桔平の口元に運んだ。

桔平は一瞬躊躇した。

己の精液を飲み込むなど、男に相応しくない行為だと思ったのだ。

だが、このままでは破滅することも桔平は理解していた。

だから、意を決して、桔平は狼男の指にしゃぶりつき、己の精液を啜った。

ねっとりとして雄臭く、不味い。

桔平は漢方薬ゼリーと思い込んで、己の精液を飲み込んだ。

喉の奥に引っかかる気持ち悪さに涙がまた零れた。

だが、狼男は桔平の苦悩など興味がないかのように、次々と桔平の顔に付着した精液を桔平の口元に運ぶ。

桔平は無心にそれを飲み込んだ。

そうして、桔平はセルフ顔射した精液を全て飲み込んだ。

「よろしい。

その従順さに免じて、顔面モザイクを入れることを許す」

ミイラ男が電子音声で桔平に告げた。

だが、桔平の心はそれにどう反応すればいいのか分からない。

「これから目隠しをし、アラームをセットする。

アラームが鳴る前に目隠しを外した場合、不服従の罰を与える」

ミイラ男の電子音声と共に、狼男が射精の余韻と飲精の屈辱で頭が真っ白になった桔平の顔に目隠しをかけた。

桔平の視界から悪夢のような光景が消え、闇が広がる。

「管理番号 52 番。

許可なく、自慰・性交をしてはならない。

当委員会が支給した下着を必ず着用しなければならない。

支給したスマホは法律に触れない範囲で携帯しなければならない。

当委員会の教育プログラムに従わなければならない。

次はない。

肝に銘じるがいい」

その電子音声を最後に、桔平の耳にミイラ男たちが機材を片付けて撤収する様子が聞こえてきた。

手足も解放された。

だが、桔平は動けなかった。

段々と現実が桔平に戻ってくる。

桔平は男に襲われ、去勢を覚悟するほどに金玉を責め上げられ、セルフ顔射させられたのだ。

そして、性奴隷管理委員会に屈服し、自らの意志で己の精液を飲み込んだのだ。

「う、あ、あ、あああああああああああ」

桔平の口から嗚咽が漏れる。

汚れた身体を、折れてしまった心を洗い流してしまうかのように涙が大量に溢れた。

だが、現実を涙で流すことはかなわず、桔平は一人きりの部屋で泣き続けた。

奥付

『編集版 性〇隷管理委員会 桔平の受難』より第一話

初出：2022 年 4 月 30 日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep